

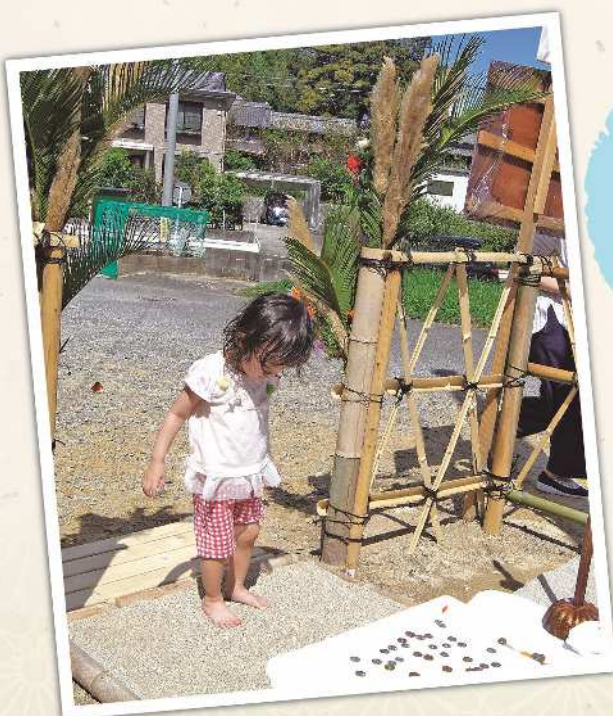
虫供養に行こう

《百万遍念仏》

当日は、鉦や太鼓の音が響き、大道場では、導師の先導で、百万遍念仏（ナンマイダ）と現世利益和讃（親鸞）が唱和され、大数珠が繰られます。

百万遍念仏では、下記地区の同行衆の役職が決まっています。

- 導師—草木 ●大数珠—白沢 ●算木積み—坂部と福住 ●鉦—卯之山
- 太鼓—板山の方々が行います。



《大塔婆》

大きな松の木に平和を願う文字が書かれたもの。木の根元に砂山が盛られ、虫塚と呼ばれています。砂山は、小さな子どもに踏ませると、「かんの虫封じ」になり健やかに成長できると言われています。



土と共に生きる

阿久比谷虫供養

みなさんは『虫供養』がどんな行事か知っていますか？

虫供養は知多半島出身で融通念仏の始祖良忍上人（1072～1132）の教えが元になり、農作業で犠牲になった田畑の虫を供養するために念仏をしたのが始まりといわれ、平安時代の終わり頃からこの地方で行われるようになった民俗信仰行事です。

虫供養とは生き物すべての命を敬い、自然の恵みに感謝する大切な行事なのです。

約900年もの長い間、阿久比の人々が守ってきた民俗信仰行事からは、わたしたちの先祖が自然とともに歩み、その恵みを大切にしながら生活してきたことがよくわかります。

虫供養は、東浦・知多・常滑と共に『知多の虫供養行事』として、昭和58年に愛知県無形民俗文化財に指定されました。

平安時代の良忍上人の教えから広まった虫供養も、天正5年（1577）坂部城が織田信長の家臣佐久間信盛の手勢によって焼かれると、治安悪化で中止に追い込まれました。

その後、戦乱が収まった江戸時代に再び行われるようになりました。

宝暦6年（1756）には行事が永久に継続できるよう寄付制が設けられ、寛政7年（1795）には虫供養の道具などを紛失した場合には虫供養の仲間から除外するといった厳しい申し合わせもなされました。

明治時代には廃仏毀釈の影響でまたもや一時中止に追い込まれてしまいましたが、住民の強い声で復活しました。

